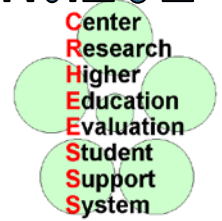


# 週刊センターニュース No.252



第252号(2009年3月23日) 毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## ○●○ 2009年 春の集中共同学習会 ○●○

統一テーマ 「大学の教育力を高める教育技術とは—クリッカーとその周辺—」

日時: 2009年3月30日(月)・31日(火)、両日とも10時30分—17時30分

場所: 金沢大学角間キャンパス 総合教育1号館 6階 E1講義室

主催: 金沢大学 大学教育開発・支援センター

企画: 教育支援システム研究部門 青野 透

### 第一日 3月30日 月曜日

●第219回共同学習会 10時30分—12時

テーマ: 「クリッカーから始まる授業改善の新段階—橋本勝他『学生と変える大学教育』(ナカニシヤ出版、2009年)第13章と第15章を読む—」

報告者: 青野 透 (大学教育開発・支援センター)

●第220回共同学習会 13時30分—15時

テーマ: 「学習動機付けとICT活用教育の課題—金沢大学の学生の現状を踏まえて—」

報告者: 鎌田 康裕 (FD・ICT教育推進室)

●第221回共同学習会 16時—17時30分

テーマ: 「クリッカーはなぜ欧米の大学で爆発的に普及したのか」

報告者: 山川 達也 (キーパッド・ジャパン社) 指定発言者: 山田 政寛 (東京大学)

### 第二日 3月31日 火曜日

●第222回共同学習会 10時30分—12時

テーマ: 「ピア・インストラクションと物理教育—クリッカーの授業活用を中心に—」

報告者: 新田 英雄 (東京学芸大学) 指定発言者: 山川 達也

●第223回共同学習会 13時30分—15時

テーマ: 「高等教育における教育内容と教育方法・技術との関係—携帯電話対応コメントカードシステムやクリッカーで思考を促し、理解度を確認—」

報告者: 宮田 仁 (滋賀大学)

●第224回共同学習会 16時—17時30分

テーマ: 「大学における学習システムとその背景」

報告者: 山田 政寛 (東京大学)

※参加ご希望の方は事前に、メール([info-rche@ge.kanazawa-u.ac.jp](mailto:info-rche@ge.kanazawa-u.ac.jp))にてご連絡をお願い致します。  
また、二日間にわたりますが、ご関心のある回だけの参加でも結構です。

## ○●○ 第15回大学教育研究フォーラム参加報告 ○●○

2009年3月20~21日、京都大学吉田キャンパスにて第15回大学教育研究フォーラムが開催された。本稿では、筆者が特に関心をもった以下の発表について若干の考察を交えながら報告する。

### ◇専門知識を広く伝えるためのコミュニケーション能力の養成

#### —「水圏環境リテラシー教育推進プログラム」での実践から—

東京海洋大学の佐々木剛先生より、水圏環境リテラシーの普及に関わる人材を養成するための「水圏環境リテラシー推進プログラム」と、その構成科目のひとつである「水圏環境コミュニケーション学」の紹介がなされた。ここでの「水圏環境リテラシー」とは海を中心とする水圏環境の機能、人と

の関わりや相互作用を理解する能力である。この授業の目標は、「水圏環境リテラシーに関連する専門分野を初等中等教育の児童生徒や教員を含む、一般人に対し効果的にファシリテートできる能力を育成する」ことである(東京海洋大学シラバスより)。言い換えれば、水圏環境リテラシーの普及に必要なコミュニケーション能力と一般の人々の学びを引き出す場のデザイン能力を養成する科目である。

この授業は、UC パークレー校ローレンス科学館の「Communicating Ocean Science for Instructors」と同館副館長ストラング氏が開発した MARE プログラム(Marine Activity, Resource and Education)を参考にしており、Learning Cycle という理論が強く反映されている。

Learning Cycle : Invitation(導入)→Exploration(探求活動)→Concept Invention(概念の革新)  
→Application(応用)→Reflection(振り返り)

Learning Cycle を意識した授業設計は、科学知識を単に講義で与えるのではなく活動の中から発見できるようになっており、一人一人の能動的な学習を引き出すという特徴がある。

発表では成果として、授業を通して受講生は水圏環境リテラシーを分かりやすく伝える技能の獲得だけでなく、「知識の獲得と実践での応用とのギャップ」、「ファシリテートの大切さと難しさ」、「自分の活動に対して他者(子供)が反応してくれることの喜び」、「他の活動への動機づけ」などを感じるに至ったことも報告された。

筆者は以下の三つの理由からこの発表に強い関心をもった。

第一の理由は、「学士力の一部としてコミュニケーション能力の習得が求められているが、実際にコミュニケーション能力に関わる授業が少ないのでは？」という筆者の思いが、発表者の問題意識に類似していたためである。筆者の個人的見解として、大学の授業で扱うコミュニケーション能力の養成が、プレゼンテーション能力の養成(しかも、人前で結果を説明する経験)にしばられてしまっているのではないかと感じている。

発表者の「近年、大学の社会貢献への期待が高まる中、各大学の専門性に応じた社会発信のためのコミュニケーション能力の養成が必要とされている」という言葉と授業内容を受けて、「場をつくる」と「他者の動きを引き出す(ファシリテーション)」能力は今後大学にて養成を求められるコミュニケーション能力になると感じた。

もちろん、これらの能力を養成するためには時間・空間的課題が多く予想されるが、水圏環境コミュニケーション学を受講した学生が「自分の活動に対して他者(子供)が反応してくれることの喜び」を感じ、「他の活動への動機づけ」にもつながっていることから、大きなメリットが予想される。

第二の理由は、Learning Cycle というモデルの可能性による。

近年、学生の能動的学習を促す工夫が求められている。少し脇道に逸れるが、近畿大学の宗像先生が同じ研究部会にて「学生は授業に対する教員の創意工夫を授業評価に強く反映させている」ことを示すアンケート結果を報告された(発表題目:授業改善と教育評価につながる相互フィードバック・システム)。ここで注目すべきは、授業レベルの高低よりも、教員の熱意や工夫、学生への応答性が重要という傾向がみられた点である。

乱暴な表現だが、この結果から学生は「何を学ぶか(What)」より「どのように学ぶか(How)」に重きをおいているといえる。ならば、学問分野の基礎や社会で求められる学力という意味で学生に学んで欲しい内容(What)は大きく変えることなく、どのように学ばせるか(How)に気を配ればよいことになる。実習や演習の授業設計で「How」に困ったときは Learning Cycle が助けになるかもしれない。

第三の理由は、誰が能動的な学習を引き出す必要があるのかという問いによる。

報告者は「単なる『専門知識をわかりやすく伝える能力』だけでなく、『リテラシー教育の中で能動的な学習を引き出す能力』を**大学生**が身につける必要性」を指摘している(発表要旨)。水圏環境リテラシー教育において「受講生たちが一般の人々の学びを引き出す」という構図を、〇〇リテラシーにおいて「大学教員が学生の学びを引き出す」と当てはめれば、「単なる『専門知識をわかりやすく伝える能力』だけでなく、『リテラシー教育の中で能動的な学習を引き出す能力』を**大学教員**が身につける必要性」が改めて思い起こされる。

(文責: FD・ICT教育推進室 末本 哲雄)